

ルーシー・スノウの反抗と征服

——「ヴィレット」に関する一考察——

宮崎孝一

「ヴィレット」(Villette, 1853) は孤児ルーシー・スノウ(Lucy Snowe)が、イギリスで病気の老婦人の看護をし、その病人の死後、海を渡って、ラバスクール大王国 (the Great Kingdom of Labassecour) の首都ヴィレットへ行き、

その学校の英語教師として勤めるようになり、やがてその学校の文学教師ポール・エマヌエル (Paul Emanuel) と愛し合うようになるまでの物語である。ラバスクールとは、作者シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) がかつて留学したベルギーをモデルとしており、ヴィレットはブラッセルに相当する。

この小説の中で、ルーシーは、独力で自分の道を切り開いていくうち、多くの人物や物事に接してその真相を見ぬくことを学ぶ。また、批判力を養い、承服できぬものには敢然と抵抗し、ついには征服していく。

まず、彼女が抵抗を感じる対象に、その勤める学校の女校

長ベック夫人 (Mme Beck) がある。この校長が、神出鬼没にあらゆる場所に入出し、自分の身は隠しながら、教師や生徒たちを監視するさまは、ルーシーのいわゆるイエズス会士的陰険さである。ルーシーが、はじめてこの校長の家に身をよせた晩すでに、彼女の持ち物は校長によって徹底的な秘密の検査を受ける。

私は眠りが浅い。真夜中に突然目がさめた。何の物音もしないが、白い姿がへやに立っている。寝巻を着た夫人である。……奇怪で、ささやかな默劇が始まった。夫人は恐らく十五分も私のベットの端に腰かけて、私をじっと見つめていた。それから、近づいて私の上にかがみこみ、私の帽子を少し持ちあげ、髪が見えるように縁を折り返した。次に毛布の上に置いた私の手を眺めた。それがすむと、着物が置いてある、ベットの下手の椅子の方に向かった。……あらゆる品物を調べるのだ。こういうことをする動機は私にも想像がついた。すなわち、衣類を

見て、それを着ている人の地位や、財産や、小きれいさなどについて判断を下したいのだ。目的は悪いとは言えないが、手段は公正でもないし、弁明の余地もない。ドレスにはポケットがついている。彼女はすっかりそれを裏返し、財布の中の金を数え、小さな手帳も開いて、落ち着きはらって書きこみを読んだ。……束にした三つの鍵は、それぞれトランクと机と裁縫箱の鍵だが、それに彼女は特別の注意を払った。これを持ってしばらく自分のへやに引っこみ、……化粧台の上の封蠟で鍵型を取り、それがすむとまた戻って来た。このようにしてすべての仕事を整然とし終えると、夫人は、私の財産をまた元の場所に返し、着物も注意深くたたんだ。(八章)

こういう場合におけるルーシーの反応の特徴は、あくまでも眠ったふりをおし通すことによつて、こちらの品定めをしようとする人物の正体を逆に見破つてしまうことである。

夫人は、数人のスパイ団をかかえており、学校の内外に起こるすべての事に関して絶えず情報を集めている。しかも、スパイたちを徹底的に利用しつつ、もし彼らが無用になれば、その瞬間から捨て去つて顧みない。夫人の、教師たちに對する態度もまた同様に峻厳である。

どういう形であろうと、夫人から助力を期待することはできなかつた。彼女の賢明な方針は、教師たちがどん

な不当な仕打ちを受け、不愉快な思いをしようとも、生徒に對する校長の人氣だけは絶対なものにしておくことであつた。教師が生徒から反抗を受けて窮地に陥つた場合、校長の協力を求めることは、取りも直さず、解雇を求めることであつた。生徒たちを扱う際に、夫人はただ、愉快な、愛想のよい、人好きのする役だけを引き受け、部下には、迅速な処置をすれば生徒の不人氣を招くに違いないような、わずらわしい問題に處する力を嚴重に要求した。(九章)

このようなベック夫人の監視や人使いの方法を、ルーシーは日ならずして見破り、むしろ、それを利用するほどになる。ルーシーは、外面的にはおとなしく、また、特に自信が強い性格ではないが、具体的な事に當つては實際的な判断力を發揮し、機敏な処置をする力を持っているのである。ついに彼女は校長に對する助力の報酬として、学校内の行動に關してほとんど絶対の自由を与えられる。最後にポール・エマヌエルとの交際に關して夫人と對立するが、このときにはすでにルーシーの方が絶対優位の立場に立っている。

「かいばおけの犬めー」と私は言った。彼女がひそかに彼を欲しがっていることを、——前々から彼を欲しがっていたことを私は知っていたのだ。……愛してもいなくせに、彼をしばらくつけて自分の利益を計るために、

彼と結婚したがっているのだ。夫人の秘密のいくつかは、私は底の底まで見通している。……彼女は私の競争者である。おもてには出さず、この上なくあたりのよい装いにかくれ、当事者以外にはだれにも気づかれてはいないが、精魂を打ちこんで私に敵対しようとしている。

夫人が全く私の支配下にあることを感じながら、私は二分間ほど彼女の前に立ちただかっていた。今のようない気分るときには、——現在のように感覚が強く刺激されたときには——彼女のいつもながらの扮装、仮面、隠れみのは、穴だらけの網細工にすぎない。その下には、冷酷無情な、放逸な、下品な人間が見すかされる。彼女は、なすすべもなく退却した。(三十八章)

かつて何の身よりも保証人もなしに、ベック夫人の許に身をよせたルーシーが、二十歳を少し越したばかりの娘でありながら、今や夫人に対してこれだけの支配力を獲得してしまつたのである。

二

この小説の中心は、ポール・エマヌエルとルーシーとが、はじめは反発し合いながら、しだいにうちとけていく過程に置かれているが、これがまた、普通の小説で扱われる恋愛とは類を異にしている。教授たちの中の最高の権力者であるエマヌエルを知るようになった初めのころ、ルーシーは次のよ

うに言っている。

彼は色黒の小男で、辛辣で厳しい。短く刈りこんだ黒い頭、幅の広い土色の額、やせた頬、広くて震える鼻孔、射抜くような目つき、せわしない態度などによつて、厳しいお化けのように見える。(十四章)

そして彼は生徒に対しても教師に対しても高圧的で、「ナレオンのよう」である。また、その判断は直観的で、偏見に満ちている。一時ルーシーが心を奪われていた医師ブレトンから彼女に手紙が来たとき、エマヌエルは激しい怒りを示す。

彼は、私に関係したことを公平な見地から見ると、寛容と率直さをもつて判断することもできない。彼は前々からきびしく、疑ぐり深かった。(二十六章)

しかし、このきびしさや、疑ぐり深さも、ルーシーの闊達な心をひるませることはできない。

エマヌエル先生が嫉妬を起しているのを見ると、私はおもしろくなる。それは彼の性質を燃えあがらせ、彼の精神の目を覚ませる。それは彼の暗褐色の顔と、青紫色の目に、あらゆる種類の奇妙な光と影を投げかけ

る。……彼の怒りには味わいがある。無邪気で、真剣で、全く理不尽なものではあるが、決して偽善的ではない。(十五章)

こうしてルーシーは、エマヌエルの一見異様な容貌や態度にも、一種の魅力があることを感じはじめた。

彼の言うこと、なすことには、不快とは言えないある種の純真さを感じないではいられなかった。……彼の風貌の精悍さ、深い、ひたむきな鋭さをたたえた目、青白く、広く、充実している力強い額、よく動く柔軟な口などに私は気づいていた。落ち着いた力には欠けていたが、動きと激しさという点では、きわ立っていた。(二十章)

学校中の教師や生徒が恐れおののいているエマヌエル先生も、このように、ルーシーには正体が見すかされてしまう。彼女は、エマヌエルの欠点とともに長所にも気づいている。そして彼女は、エマヌエルを操縦する方法についてもはっきりとした結論に達する。

いつも彼に服従してばかりいるのはよくない。ときには反抗することが必要であった。じつと立って、彼の目を見上げ、彼の要求が無理だということを——その独裁

は圧制に通ずるということを——言ってやる方がよかつた。(三十章)

彼女はまた、「こちらは冷静に構えていて、相手の怒りをあふり立てることに、私は一種の楽しみを感じた」とも言っている。(十九章) 今まで、ひたすら恐れられることのみに馴れていたエマヌエルにとって、ルーシーの、このような態度は新しい刺激であり、一見、か弱い女性の、この剛毅さに賛嘆したことが、彼の恋心の始まりであった。それは、「ジェーン・エア」(Jane Eyre)において、ロチエスター (Rochester) がシェーンを愛するようになる経過にも似ている。ともかく、ルーシーは、校長ベック夫人を屈服したのと、ほとんど同じ手段によって、一人の中年の男性の心を捉えたのであり、これもまた、彼女の征服の一つであった。彼女の方で彼に対していただいていた気持ちがどんなものだったかは、次のことばに明らかである。

彼は私が彼と同じ星のもとに生まれたのだと言った。彼は、その星の光を、私の上に旗のように広げたように思われる。かつては……彼のことを苛酷で異様だと思つた。背が低く、やせて、骨ばり、色が黒く、態度も変わつていて、すべて不愉快であった。今は、彼の影響にひたされ、彼の愛によって生き、理知によって彼の価値を知り、情によって彼の善良さを感じているので——私は

どの人よりも彼が好ましいのである。(四十一章)

このことばには、若い女性のひたむきな恋心といったものは余り感じられない。たとえ、恋と呼べるものだとしても、それは、目ざめた者の、相手をはっきり見つめた上での恋である。

三

ルーシーは、自分の勤める学校の生徒たち一般についても批判的である。彼女たちの下品さ、知能の低さ、不道徳性、食欲の旺盛さなどについてしばしば言及する。

都合上うそが必要なときは、いつも彼女らは気軽に、気前よくうそをつき、いささかも良心のとがめを感じない。ベック夫人の寄宿寮では、皿洗い女から校長自身に至るまで、うそをつくことをためらう者はただの一人もいなかった。(九章)

また、

生徒たちは、自分たちの無能、無知、怠惰を目の前に見せつけられても、それが、じめじめした陰性なやり方でなされない限りは、何の悪意もいだかない。授業に余分の三行をつけ加えれば大ききわぎをするが、自尊心を傷

つけられたというのでは反抗したためしはない。(九章)

ルーシーはこのような生徒たちに対して、はじめから高飛車に出ることによって新米の教師としての自分がなぶり者にされるのを防ぎ、むしろ彼女らを屈服したいきさつを語っている。これは教師対生徒の敬愛に裏づけられた関係ではなく、女性対女性のすさまじい闘争であった。

さて、エマヌエル先生が教職をやめることになったと聞いて生徒たちが歎き悲しむときも、ルーシーは彼女らの涙に動かしはしない。

すすり泣きをする生徒たちに対して、私は、いらだたしい感じがしたことを覚えていいる。実際、そんな感情の動きは大して価値のあるものではなく、ヒステリックな興奮にすぎない。私は容赦なくそう言い、半ば嘲笑してやった。私は厳しい態度をとった。実を言うと、彼女らの涙や、しゃくりあげる声には我慢がならなかった。癩にさわってたまらなかったのだ。(三十八章)

ルーシーは、女生徒たちに関してのみならず、婦人一般に対しても概して批判的であり、攻撃的である。(唯一の例外はポーリーナ・ホーム(Polina Home)であるが、彼女は対等の女性として考えるには余りにも繊細な、妖精じみた人物であるが故に、ルーシーの批判の対象にならないのである)

う。次のことばにも、女性に関するルーシーの嫌悪が含まれている。

婦人や女の子が、自制力や克己心を持っているのを見たことは、私はほとんどない。私の知っている限りでは、くだらない内緒事や、たわいない些末な感情についておしゃべりをする機会は、女性がめったに見すごすことのない楽しみなのである。(二十五章)

また、ベック夫人と医師グレラム・ブレトン (Graham Breton) が親しく交際していることについては次のように述べている。

この医師は、財産がなく、専ら医業で生計を立てているということだ。夫人は、多分十四歳ぐらい彼より年上だが、決して年も取らず、しわもよらず、衰えもしないたちの女だ。二人はたしかに親しい間柄である。彼の方では恐らく愛を感じてはいまい。しかし、この世で真の恋をする人が、ましてや恋のために結婚する人が、果して何人いることだろう。(十一章)

女性一般に対する批判は、ひいてはこのように、恋愛に関しても懐疑的なことばを吐かせるまでになっている。

ルーシーは女性たちの中でも、特に、心が空虚でありなが

ら外見の華麗な美人に対して冷たい批判の眼を向けるが、そういう美人の代表として描かれているのが、ジネヴラ・ファンシュー (Genevra Fanshawe) である。

私はたびたび、ファンシュー嬢のような、気軽で無頓着な気質と、華やかでもろい種類の美の持ち主たちは、忍耐力が全然ないことに気がついた。こういう女性は、逆境に置かれると、雷に会ったビール同様、すっぱくなってしまう。こんな女を妻にした男は、一生の間うららかな日の照る生活を保証してやる覚悟が必要である。(六章)

ジネヴラは自分の恋人の容貌についてさえ、第三者に伝えることができぬ。本人自身、相手をはっきり見たことがないからである。ついに彼女が、彼女同様に軽薄で、身持ちの悪い貴族と結婚して後も、相変らず浮わつた、他人ばかりを頼りにした生活を送っていることを描いて、ルーシーは、このような女性の生き方に対して憫笑を送っている。

また、ルーシーは、自分に種々の親切を尽くしてくれたルイザ・ブレトン夫人 (Louisa Breton) に関してもある批判的態度を控えようとはしない。

彼女と私との相違は、たとえて言えば、船員が全部そろい、その船長は陽気で勇敢で冒険的でもしかも慎重で、穩

かな海を安全に航行していく堂々たる船と、一年の大部分は古ぼけた暗いボート小屋に、一そっだけで引き上げられ、荒天に大浪が立ちさわぎ、雲が水面すれすれに垂れこめ、危険と死が大海原の支配権を分ち合うようなときだけ海に降ろされる救助艇との差である。そう、「ルイザ・ブレトン号」は、そんな夜に、そんな海に、港を出て行ったことは一度もなく、その船員は、そんなことは想像することもできないのだ。それゆえ、半ば沈みかけた救助艇の乗組員は、その思いを胸に秘め、長話をしようとはしないのである。(十七章)

人生の苦難や暗黒面を知らずに過ぎて来たブレトン夫人のような人物は、ルーシーは初めから別世界の人間と考えて、真剣に相手にしようとはしないのである。また、ブレトン夫人の息子グレムと、ポーリーナとの恋愛と結婚生活の幸福さについても、ただ祝福を送るのみで、それ以上の価値を認めてはいない。

四

ルーシーは学校が長い休暇にはいり、教師や生徒たちが立ち去った後の寮で孤独の生活を送るうち、言い知れぬ不安と憂愁に捉えられ、カトリック教会に行つて神父に自分の乱れた心を救ってもらおうとしたことがあつた。このときの彼女の精神は完全に打ちひしがれた状態にあり、新教徒である自

分がカトリックの教会へ行くことの異常ささえ意に介さなかつた。しかし、一旦精神が立ち直つて後の彼女は、カトリックに対しても、神父に対しても批判的な態度をくずさうとしない。

ローマ教会は、子供たちを肉体的には壮健に、精神的には虚弱に、肥り、血色はよく、健康で、陽気で、無知で、ものを考えず、疑わぬように育てようと努めている。「食べ、飲み、生きよ」と教会は言う。「肉体を大切にせよ。魂はこちらに委すのだ。魂をいやし、導くことは引き受けた。最後の運命はこちらで保証する」と。これは、真のカトリック教徒がすべて、自分の方が得ると考えている取引である。(十四章)

また、

人々の苦難や愛情を用いて、彼らを捉えて置くための鉤が作られる。貧民は食と衣と住が与えられるが、それは恩義によつて彼らをローマ教会に結びつけるためであり、孤児たちは育てられ教育されるが、それはローマ教会の柵の中で成長させるためであり、病人は看護されるが、それはローマ教会の方式と礼式に従つて死なせるためである。……男も女も肩に食っている重い十字架を背負わねばならない。すべては、ローマに仕え、その神聖さ

を証明し、その力を保証し、暴君たる「教会」の支配を
広げんがためである。(三十六章)

かつてルーシーが救いを求めたときは神聖なものと映った
シラー神父 (Père Sias) さえ、後には、彼女とエマヌエル
の恋を邪魔するだけの、策謀に満ちた現世的な人間になり下
がってしまった。そしてエマヌエルが、ローマ教会やシ
ラー神父の圧力を断ち切って、彼女への恋を全うしようとす
る気持ちになった所に、ルーシーは、自分のもう一つの勝利
を認めているのである。

五

ルーシーの批判の眼はさらに、読者の趣味にさえ向けられ
ていく。学校の寮舎に、尼の幽霊が出るという言い伝えを紹
介した後、ルーシー自身が幾度かこの幽霊と思われるもの
姿を見て恐怖を感じる事が述べられるが、実はそれは、禁
男の寮舎にジネヴラを訪うためのド・アマル (de Hamal)
伯爵の扮装だったことが後に露見する。「ジェーン・エア」
において、ソーンフィールド館 (Thornfield Hall) につきま
とう妖気の解明についても、同様の扱いが見られたが、ルー
シーはここで、読者が持っているかも知れないゴシック・ロ
マンズの怪奇趣味に肩すかしを食わせているように感じら
れる。チェスタートン (G. K. Chesterton) がダイケンス
(Charles Dickens) の小説の怪奇性について述べた評語、

“The secrecy is sensational; the secret is tame.”は、
そのまま、この場合にも当てはまるであろう。

直接に読者を相手にしたことばが非常に多いのも、この小
説の特徴の一つである。ルーシーは、読者の感受性や判断力
に対して信頼を置いていないかの如く、折にふれて、ことわ
りや註釈を加えることを忘れない。今、そのいくつかの例を
拾ってみると、

ロンドンに行くからといって、読者がお考えになるほ
ど、私は危険を冒したわけでもなく、冒険心を発揮した
わけでもなかった。(五章)

読者はロシーヌ (Rosine) のことを余り悪くお考えに
なっていない。大体から言えば、彼女はたちの悪い
人間ではなかった。(十三章)

夫人のための贈り物を買うために、年々学校中から寄
付がつけられていることを、夫人自身はいささかも知ら
ず、夢にも考えていないことになっていた。品のよい読
者は、この点について、夫人のへやで行なわれる簡単な
打合わせを、どうか適当にとばして読んでいただきたい。
(十四章)

宗教心の強い読者よ、あなたは、私が今書いたことに

ついで、長々とお説教をなさるだろう。道徳家も、厳しい賢者も同様だろう。……どなたでも、好きなようになさるがいい。……皆さんのおっしゃることは正しいに違いない。しかし、恐らく、私と同様の境遇に陥ったら、あなた方も、私と同じように、道を誤ったことだろう。

(十五章)

読者よ、この話が進むにつれて、私のジョン先生に対する意見が変わることに気づかれても、矛盾して見える点は許していただきたい。私はそのとき感じたままの気持ちを述べ、そのとき目に映ったままの性格を描いているのである。(十八章)

読者の感じ方に対する配慮が最大に發揮されるのは、この物語の結末の部分である。エマヌエルが三年間の外国滞在の後、ルーシーの許へ帰ってくることになった十一月の数日間、嵐がたけり狂い、大西洋に難破船の残骸がまき散らされた。エマヌエルの運命についても暗い予測しか許されそうにない。しかし、ルーシーは結びのことばとして次のように書いている。

ここで止めよう。今すぐ筆を止めよう。言うだけのことは言った。静かな、親切な人々の胸を騒がせないようにしよう。明るい想像力の持ち主には、希望を残して置

こう。大きな恐怖から、歓喜が再び生まれ、危険から救助の狂喜がよみがえり、死から奇蹟的な救助がもたらされ、帰国再現が成就したと、彼らには考えていてもらおう。結婚と、それに続く幸福な生涯を思い描いてもらおう。(終章)

このことばは、読者の感性に対するいたわりであろうか、それとも、侮蔑であろうか。□

この作中におけるルーシーの態度には、人生に対する抵抗が見られるとともに、その語り方には、ある程度のあきらめが感じられる。それは幻滅に根ざす苦々しさを宿し、何事につけても多くを期待すまいとする用心深さも見られる。これをすべてそのまま、この作執筆当時のシャーロット・ブロンテの気持ちであると断定することは勿論危険であろう。しかし、この小説の、どの点に、どの程度まで作者の経験や気分が反映されているかを考えてみることは、やはり興味ある問題である。

註 (一) G. K. Chesterton: *Charles Dickens*, VII

(二) 作者の父親がハッピー・エンディングを望んだが、作者の気持ちとしては、エマヌエルの海難による死のイメージがすでに変更しがたいまでででき上がっていたために、このような妥協的な書き方をしたのだと、ガスケル夫人は語っている。父親は、シャーロットにとって読者の一代表だったであろう。

(cf. Mrs. Gaskell: *The Life of Charlotte Brontë*, xxv)